芳年写生帖

野村胡堂

青空文庫

絵師の誇り

霖雨と硝煙のうちに、上野の森は暮急ぐ風情でした。その日ばかりは時の鐘も鳴らず、昼頃から燃え始めた寛永寺の七堂伽藍、大方は猛火に舐め尽された頃までも、落武者を狩る官兵の鬨の声が、遠くから、近くから、全山に木精を返しました。

「今の奴、何処へ逃げた」

「味方を四五人騙し討ちに斬って居るぞ。逃してはならぬ奴だ」

「まだ遠くへは行くまい」

「見付かったら、朋輩の敵、一と太刀ずつ斬るのだぞ」

背負太刀、ダン袋、赤い飾毛をなびかせた官軍が五六人、木立を捜り、藪を分けて鶯谷の方へ降りて行きます。

その背後から、物の影のように現われたのは、彰義隊士日下部欽之丞、二十四五の絵に描いたような美男ですが、軽傷を受けた上、幾人か斬った返り血が、乱鬢と、蒼い頬と、黒羽二重を絞った白襷に反映して、凄まじさというものはありません。

「――――」

不敵な舌鼓を一つ、四辺を見廻した欽之丞は、又も近づく人影に驚いて、木立の蔭に身を潜

めました。

「畜生ッ、――俺は怪しい人間じゃねえ」

血の臭いに酔って、無暗に吠え付く犬を叱り乍ら、桐油をすっぽり冠って、降りしきる細雨の中をやって来たのは、絵師の月岡米次郎こと、大蘇芳年の一風変った姿です。

明治元年五月十五日の夕刻。

その時芳年は三十歳、御家人の子に生れて武士の血を享けた筈ですが、月岡雪斎に養われ、菊池容斎、葛飾北斎の風を学んで、心も姿もすっかり町絵師になり切って居りました。

浅葱の股引に草鞋がけ、桐油に上半身を包んで、目ばかり出した風体は、腰の矢立てと懐の画帳が無かったら、葛飾在から来た水見舞と間違えられるでしょう。

油のような生温かい雨が降るのに、芳年の身体は、ガタガタ小刻みに顫えて、時々はしゃっくりをして居ります。その上足許も不確かで、ヒョロヒョロと行っては、ぬかるみに足を取られて、泥の中へヘタヘタと坐ったりしました。

そのくせ、藪の中や道の上に、斬られて死んでいる死骸を見ると、彰義隊であろうと官兵であろうと一々覗いて、その相好と、歪んだ姿態を見極めずには居られなかったのです。

「ひどい傷だが、――仏様のような穏かな顔をして居る」

そんな無事な死顔は、芳年の興味を引かなかったのでしょう。

「これは凄い」

時々は死体の前に踞んで、懐から出した半紙横綴の帳面に矢立の筆を抜いて――細雨をかばい乍ら、写生の筆を走らせました。

不意に――

「居たぞ居たぞ」

バラバラと押っ取巻く官兵、ギラリギラリと幾条かの刃が芳年の眼に焼け付きました。

「あッ、お許し」

驚き騒ぐ芳年、桐油を引き※られて襟髪を掴まれたまま、二つ三つ小突き廻されます。

「何者だッ、うぬッ」

「お許し、お許し下さりませ。私は怪しい者じゃございません」

行儀の悪い猫の子のように摘み上げられた芳年は、意気地無くもガタガタ顫え乍ら、両手を合せて居ります。

「怪しくないことがあるものか。其処で何をして居た」

風体は落武者とも見えません。多分戦塵のまだ納まらぬ山内に潜り込んで、掠奪を目論む泥棒とでも思ったのでしょう。

「絵を描いて居ります。私は、私は芳年と言う浮世絵師で――」

「何？　浮世絵師？　出鱈目な事を言えい。浮世絵師と言えば、美人や、役者や、道中の景色などを、面白可笑しく描いて、女子供の慰み物にするのが稼業ではないか、――どれ見せい、

貴様の絵は——何んだこりゃ、どれもこれも、気味の悪い、斬り合いや、死骸や、梟し首ばかり、これでも浮世絵師と言うのか、怪しい奴ッ」

頭立った一人の武士、芳年の写生帳をバラバラと開いて、不審の眉を顰めます。

「そ、それは違います。あなたの仰しゃる遊女や役者や道中絵を描くのは、泰平の世の浮世絵師、——女子供の慰みにする気はなくとも、世の中に事が無いと自然絵までが穏かになりますが、此節のように、斬った張ったの世の中、耳元で鉄砲の音のする時節には、それ相応の浮世絵がなくてはなりません。この世の中に様々な姿を、あるが儘に写して、後の世に伝えるのは、絵筆とる者の勤めでござります。——今時華魁や役者の絵を描いて、一人で悦に入っていられましょうか」

芳年は一所懸命でした。自分に掛けられた疑惑を解くというよりも、硝煙と血潮の洗礼を受けた浮世絵師の、精一杯の誇りを——斯う高らかに言ってやり度かったのです。

「可笑しな奴だ、言う事は一と通り筋道が立っているが——そのくせガタガタ顫えて居るじゃないか。そんな臆病者に、血腥い場面が写せると思うか」

「写しますとも、ヘエ、身体の顫えるのは疳のせいで、私の臆病のせいじゃございません。こんな時本当に突き詰めた人間の姿を写して置かなきゃ、——私は浮世絵師に生れた甲斐がありません。何んの」

「よし、それじゃ、もっと凄いところを見せてやろう、一緒について来い」

「ヘエ――」
「さア」
促されて芳年は起ち上りましたが、意気地無くも膝の蝶番が崩れて、ヘタヘタと綿のように泥濘へ坐ってしまいます。
「た、起てません」
「ハッハッ、馬鹿な奴だ。腰が抜けたのか、そんな事で本当の戦が描けるものか」
「少し気を落付けさせて下さい、直ぐ治ります」
「よしよし、何時までも腰抜の相手になっても居られまい。誰か二人ばかり、此辺で見張って居るが宜い、我々はもう一度落武者を狩り出して来よう」
芳年は腰の抜けたまま、松の根方に縛り付けられ、官兵二人はそれを見張るともなく残されました。
あとの一隊はバラバラと上野の森へ、暮れ残る道を取って返します。

落武者欽之丞

「やい、絵師」
「ヘエ――」

「俺を描いて見ろ」
「ヘエ――」
「この武者振りを一つ描いて見ろ、出来が良かったら、国への土産にしてやる」
一人の官兵は威儀を作りました。
「縛られて居ちゃ描けません」
芳年は泣き出しそうでした。
「よしよし、それじゃ暫らくの間縄を解いてやる。その代り絵の出来が悪いと勘弁しないぞ」
「それじゃ御免蒙ります」
「何？」
「出来不出来は臨本次第で、一たん筆を執った上は、私の儘にもなりません」
「俺の武者振りが悪いというのか」
「そう言うわけじゃございませんが、お気に召さないといけませんから、描くのは勘弁して下さい――死人や梟し首と並べて描いちゃ、第一気色が悪うございます」
芳年は縛られ乍らも、頑強にはね飛ばしました。こみ上げて来る強大な自尊心がガタガタ顫え乍らも、斯う言わせずには措かなかったのです。
「無礼な奴だ、そんな事を言うと、痛い目を見るぞ――絵描きだと言っても、描くところを見なければその帳面の絵だって、誰が描いたか解ったものじゃない。其方、彰義隊の落武者では

ないか」

「と、飛んでもない」

そう言う芳年の後に廻って一人は鍔を鳴らしました。

「此奴、斬って捨てようか」

「フム、それも宜かろう」

二人は何やら合図をして居ります。

「あッ、お許しを。私は、彰義隊なんかじゃございません」

颯と来た一刀、縛られ乍らも危うく首を縮めましたが、二度目の太刀は防ぎようはありません。

が、その時奇蹟が起りました。芳年の頭上に振り冠った一刀は宙に飛んで、

「あッ」

飛退く官兵の一人は、足を苅られて屏風の如く倒れたのです。

「己れッ」

飛付くもう一人の官兵の前へ、石垣を這い上ってスックと立ったのは、先刻姿を隠した日下部欽之丞の満身に返り血を受けて、地獄の底から跳出した、幽鬼のような物凄い姿です。

二人の官兵はよく闘いましたが、一人は足を苅られ、一人は不意を喰って、死物狂いの欽之丞の敵ではありません。真にあッと言う間に、左右に斬って落されました。

二人の官兵を片付けた欽之丞は、芳年の側に寄って、夕闇の中からその顔を差覗きました。
「気を喪ったのか、馬鹿な奴」
冷たい笑が頬に淀んだのもほんの暫らく、次の瞬間、欽之丞の手は、芳年の縄を解いて、その着物を剥ぎ始めます。
「あッ、お助け、命ばかりは――」
芳年は漸く気が付きました。
「命は取らぬが、その方の着物が入用なのだ、暫らく借りるぞ」
武装を脱ぎ捨てた欽之丞は、芳年の袷を着流し、脇差だけ一本、深々と懐に呑み、幸い道端の水溜りで、ザッと手足や顔の血潮を拭き取りました。
心持髷を直して、芳年の手拭を取上げて冠ると、何うやら彼うやら町人らしくなります。
「それ、これは礼だ」
ポンと投り出したのは小粒が二つ三つ、
「あ、もし、お武家様」
芳年はその小粒には目もくれず、襦袢一つの姿で泥の中に起上りました。
「何んだ、金が不足か」
振り返った欽之丞、弥蔵さえも拵えて、頬冠りの中に匂う顔は、歌舞伎芝居の花道で見るような男振りです。

「その帳面だけは返して下さい、――そいつは、私の命から二番目で」
「これか」
無意識に懐にねじ込んだ帳面を取出すと、欽之丞はポンと投ります。
「あ、泥が附くじゃありませんか」
絵師の憤懣が、ツイ軽い抗議になりますが、欽之丞はそれを耳にも掛けず、夕闇の濃くなり行く上野、谷中、道灌山かけての木立の中を見て居ります。
「待て待てッ、怪しい奴」
不意に藪を分けて一人、日下部欽之丞の行手に立ち塞がりました。羅紗の陣羽織、細雨を凌ぐ陣笠、抜刃のままの一刀を側構えに、一寸の油断も無い気組です。
「ヘエヘエ、私共は土地の者でございます。戦見物と申しちゃ悪うございますが、一生に一度の事と存じまして、ツイ、ウカウカと深入りいたしました。お見逃しを願います」
日下部欽之丞は腹からの町人らしい滑らかな調子でした。江戸侍の器用さでしょう。
「もう一人の男は裸体じゃないか」
「連れは落武者に剥がれました」
日下部欽之丞ケロリとしてこんな事を言うのです。
「頬冠りを取れ」
「ヘエ――」

「頬冠りのまま武士に挨拶する奴があるか」
「ヘエ――」
欽之丞の左の手は挙りました。頬冠りを取ると見せて、右手は早くも懐の申の脇差の柄に――
「え――ッ」
紫電一閃、
「わッ」
羅紗陣羽織の肩から鮮血を吹き上げて、相手は倒れたのです。
「お助けッ」
芳年も、あまりの事に肝を潰して、欽之丞の足許に這いました。
「馬鹿奴(め)ッ、何んと言う声だ、斬られたのは貴様ではないぞ」
「ヘエ――」
「其方の住居は何処(どこ)だ」
血刀を拭い乍ら、欽之丞は訊ねました。
「あ、浅草の馬道でございます」
「大して遠くはないな、――今晩一と晩俺を泊めろ」
「――――」

「いやか」

生血を拭いたばかりの刀が、芳年の眼の前へ、思わせ振りに動きます。

「と、飛んでもない」

「では、案内せい、――こんなところに長居は無用だ」

「――――」

「さア」

促され乍ら、芳年は此処に釘付けになりました。夕闇の中に絶え入る、今斬られたばかりの武士の相好が、芳年の興味を犇と捕えたのでしょう。

何時の間にやら取出した帳面、それをガタガタ顫える膝の上に展べて、芳年は矢立の筆を噛んでいたのです。

悪い相談

それから四五日、江戸には血生臭い風が吹き続きました。

その風に憑かれでもしたように、大蘇芳年は、朝から晩まで、街から街へと、物騒な噂を追い歩いて居たのです。

小塚ヶ原の刑場は言うに及ばず、彼方の橋の袂、此方の長屋の裏で、彰義隊の落武者が、薩

長の巡邏兵に見付けられ、縛られ、斬られる有様を、吐気を催すような嫌悪と、病的な熱情とで、一々画帳に納めなければ承知しなかったのです。

　馬道の留守宅では、押かけ女房のおよつが、これも押かけ落人の日下部欽之丞を介抱して、世間を狭く暮して居りました。およつは、園花と言って千住で勤めた女で、年が明けると、大した歓迎もしない芳年のところへ轉げ込み、女房気取りで三月四月も納まっていると言った質の女でした。

「本当にあの晩ほどびっくりしたことは無いよ。襦袢一枚のあの人の後から、彰義隊へ入ったという欽さんが、のそりと入って来るんだもの――」

　およつは、芳年の留守の間、狭い六畳の、日下部欽之丞の枕許に坐り切りで、根が生えたように、斯う話し込んでいるのです。

「俺だって驚いたよ。此春年が明けて、千住から消えたお前が、場所もあろうに、俺が逃げ込んで来たヘボ絵描きの家の、長火鉢の前に納まって居ようとは、お釈迦様でも気が付くわけはねえ」

　欽之丞は、そんな伝法な口をききます。腕はよく出来ますが、旗本の冷飯食いで、およつの園花とは、二年前からの深間だったのです。

「でも、斯うして逢えたのも、深い縁じゃないかねエ欽さん、――いくら私が図々しくたって、旗本のお屋敷へ、誓紙起証を振り廻して乗込むわけにも行かず、仕様ことなしに一番甘そうな

お客の絵描きの家へ轉げ込んだのさ。其処へ落武者になった欽さんが飛込んで来るなんて、草双紙にも滅多に無い筋じゃないか、――あの通り世間は物騒だし、幸い主人は朴念仁で二人の仲に気が付かないから、五年でも十年でも、神輿を据えて逗留しておくれよ、ね欽さん」

長い煙管を吸い付けて布団の中へ入れると、およつの身体は横っ坐りに、肘はもう、男の布団へやわやわと重しになるのでした。

「傷はもう癒ったぜ、何時までも斯うしていた日にゃ、人間の造作が弛むよ、後生だから起してくれ」

煙管をポイと投って、欽之丞は枕へ頬杖を突いたなりに、下からおよつの滴る風情を見上げるのです。

「あれさ、お前、起き出した時は、追い出される時じゃないか、それに縁側やお勝手でウロウロされちゃ、近所の人の手前もあるし」

「その近所に、飛んだ綺麗な娘が居るじゃないか」

「まア、呆れたよ。もうあれを見たのかい、――でもあれだけはお止しよ。お浜坊と言って、素人のくせに飛んだ摺れっからしさ。何処が良いか知らないが、うちの朴念仁にポーッと来て居るんだって、ホホ」

「ヘエ――、芳年師匠、芸道ばかりと思ったら、そんな腕もあるのかい」

欽之丞は何処までも面白そうです。

「そう言うけれど、私はつくづくあの人が怖くなることがあるよ」
「あんまり物驚きをする柄では無いようだが、――何が一体怖いんだ」
「あの通り、絵を描くより外に望みの無い人だし、臆病なほど大人しいから、踏台に丁度よかろうと思って連れ添って見ると――」
「――――」
　およつはごくりと固唾を呑みました。
「あの通りの良い腕を持ち乍ら、右から左へ金になる、華魁や役者の絵を描くのが大嫌いで、たまたま筆を取るかと思えば、不気味な無惨絵ばかり――、そんなものが金になるわけが無いから、家の中は何時まで経っても火の車さ」
「――――」
「上野の戦さが始まると、その病は嵩じるばかり、毎日目の色を変えて飛出しては、斬り合があった、晒し物があったと、三里も五里も歩き廻って、暗くなってから、狐が落ちたような顔で帰って来るんだもの」
　およつはそう話し続け乍ら、何んとなく胴顫いを感ずる様子です。
「私はつくづく愛想を尽き果てたよ。幸い飛込んだお前さんは、私の為には渡りに舟さ、迷惑だろうけれど、何処へなと連れて逃げておくれ、ね欽さん」
「俺もそれを考えないわけじゃ無いが、何んと言っても、まだ探索の目が厳しいから、一と足

路地を出たら、どんな事になるか解ったものじゃない。それに何処へ行くにしても先立つものは金だ」

「それなら幸い――」

およつは、少しばかり隠して持っている、自分の虎の子のことを考えて居ました。

「三河島には縁家がある。今日芳年が出る時、一筆書いて持って行って貰ったから、今にも帰って来たら、何とか返事があるだろう」

日下部欽之丞は、何時の間にやら、床の上に起直って居りました。二つ三つ受けたかすり傷は、もうすっかり癒って、此儘函館へも飛べそうな心持です。

「それじゃ、私が一緒に行けないではないか。あの人に行先まで教えてしまっては、命の鍵を握られているも同様、それに、二人の仲を薄々嗅ぎつけた様子だから、後腐れのないように、バッサリやって、何処か遠くへ飛ぶ工夫が肝心だと思うが――」

およつの肝の太さ、あまり気の進まぬ日下部欽之丞を説き伏せて、底の知れない悪魔の淵へと誘い入れる積りでしょう。

隣の娘お浜

「ちよいと」

ひそやかな声に呼止められて、芳年は思わず足を淀ませました。今日は不思議に早く帰った路地の入口、共同井戸の前に、白い顔が自分を見詰めて居たのです。

「お浜さんじゃないか、何んか用事かい」

芳年は気軽な調子で斯う立ち止りました。世帯摺れはして居りますが、十九になったばかりのお浜には、娘らしさが、顔にも姿にも、声の爽やかさにも充分過ぎるほど匂って居たのです。

「今入って行くのは、お止しなさいよ、迷惑する人が二人あるようだから」

その娘の口に含んだ毒が、妙に芳年を焦立たせます。

「何？」

「ね、芳年さん、人のことだけど、私はもう、腹が立って腹が立って、あの彰義隊の生っ白い二本差を、いっそ屯所へ訴人してやろうかと――」

「シッ――」

二人は継穂もなく、黙って顔を見合せました。

「お前さんが、あんまりお人よし過ぎるんですよ。あんな恩知らずの畜生は、なぶり殺しにでもされて――」

「なぶり殺し？」

「首は三尺高い木の上に梟され、死骸は犬の餌にでもなりや宜いに――」

お浜の怒は際限もなく爆発します。芳年をいとしと思う心が、斯うまで極端に働いて、全く

違った方角へ忿怒の形で発展して行ったのでしょう。

「嬲り殺し、――梟し首、――そして死骸は犬に――」

芳年の空想力は鼓舞されました。無慚絵の素晴しい題材が、お浜の言葉の上に、活々と築き上げられて行くのです。

「足りない、まだ足りない」

江戸人の心を恐怖のドン底に投込んだ、私刑、暗殺、押込、斬合い、――そして最後に彰義隊の戦争から、寛永寺三十六坊の炎上、八百八町の落武者狩までの、血と焔の印象が、まだまだそんな事では表現し切れなかったのです。

「何が足りないと言うんです、え？」

「凄さが足りない」

「え？　――お前さん、確りして下さいよ。あんな二本差なんか、芋侍に引渡しさえすれば、それでお仕舞なんだから」

お浜には、芳年の心持が解る筈もありません。日下部欽之丞とおよつの関係を言い当てられて、フラフラと気が変になったのであるまいか――お浜はそんな事を考えるのが精一杯だったのです。

「放って置いてくれ、お浜さん、俺にも少しは考えたことがあるから――」

解ったような、解らないような事を言い捨てて、芳年は自分の家へ入って行きました。

「――――」

その臆病らしい姿、作り笑いさえ浮べた横顔を、お浜はどんなに腑甲斐のないものに思ったのでしょう。

御家人の子に生れて、その描く絵と同じように、骨っぽい男らしい人柄を見上げる心持で居たお浜は、近頃の芳年の意気地のない態度に、言いようのない憤懣を感じて居たのです。

「皆(みな)んなあの女のせいだよ」

お浜の眼には、恥というものを、何処(どこ)かに置き忘れて来たような、およつの白粉焼(おしろいやけ)のした顔が、はっきり浮ぶのでした。

恐ろしい予感

「日下部さん、御安心なさい。三河島の御親類じゃ、日下部さんが無事と聴いて、大喜びでしたよ」

芳年の言葉にも態度にも、何んのこだわりもありません。

「それは有難(ありがた)い」

日下部欽之丞は、ツイ今しがたまで、およつと、よからぬ事を企んでいたことなどは、綺麗に忘れてしまった様子です。

「で、――馬道よりは近所が遠いだけでも身を隠す都合が宜かろうから、すぐおつれするようにと、斯う言うお言葉でございました。世間が物騒だから、お返事を口移しで、書いたものは持って参りませんから――」

「それで結構、飛んだ御苦労であったな、早速支度をして、今夜にも出かけるとしようか」

欽之丞はもう、まだ癒らぬ首の傷のことも忘れて、床から飛起きて居りました。

「いえ、夜は反って物騒ですよ。私は諸方をほッつき歩いて、其辺中の官兵の屯所は、一つ残らず顔馴染だから、私と一緒にお出でなさい。とがめられたら、私の弟子ということにしましょう。陽の当るうちの方が、どんなに安心だかわかりません」

「成程、そう言ったものかも知れぬな」

日下部欽之丞は支度を始めました。月代を広く取って、根を下げた町人髷、芳年の袷、手拭はわざと肩に、脇差は鍔を外して懐に隠し、突っかけ草履で、芳年の後に続きます。

「ね、欽さん」

「――――」

門口まで追って出たおよつ、芳年が一と足先へ行ったのを確かめて、

「わざと途中で手間取って、何処か人気の無いところで――」

およつは手刀で、そっと物を切る真似をして見せます。

「それが、およつ――」

「待ってますよ、暗くなったら、直ぐ迎いに来て下さい。解って欽さん」

「――――」

欽之丞はうなずくと、一と足先に行った芳年の後ろ姿を追いました。

未刻から申刻頃まで、

およつは坐っても起ってもいられない心持でした。長火鉢の前へ行ったり、門口へ出たり、お勝手を覗いたり、煙草を吸ったり、茶を呑んだり、溜息をついたり、

「欽さん」

何んか邪まなことを念ずるような心持で、不思議に胸騒ぎに悩み続けたのです。

ヒョイと見ると、垣の間から白い顔、

お浜の狷相な眼と、人を馬鹿にしたような――その癖、男好きのしそうな赤い唇が見えるではありませんか。

「何んだい、お前は？　昨日も一昨日も、雌犬のように、変なところから覗いたりして、いくら棟割長屋だって、垣の中は人様の城郭だよ、風の悪いことしやがると、水ブッ掛けるから」

およつは気が立って居りました。

「芳年さんは、まだ帰らないの？」

お浜の調子の邪念の無さ。

「それが何うしたと言うのだえ？」

ツイ釣られるともなく、およつも縁先へ泳ぎ出しました。

「だって、ツイ先刻、田圃で彰義隊の落武者が捕まって、斬ったとか斬られたとか、大変な騒をしたようだから、此方に何んか変りが無きゃ宜いと思って――」

お浜の調子のさり気ない滑らかさは、およつに取っては、此上もない威嚇でした。が、――あんなに用心深い支度をして行った欽さんに、万に一つ間違いなどある筈もありません。あの人が訴人するか、屯所へ引渡したのなら別だけれど、あんな臆病者に、そんなことが出来る筈も無し――盛上って来る恐怖を、無理にも押付けて、およつは乾く唇を噛みました。

「彰義隊の落武者？　そんな者に掛り合いは無いよ。余計なお節介をするより、さっさと自分の家へ帰って、内職の楊枝でも拵えるが宜い、馬鹿馬鹿しい」

「そんなら宜いけれど――」

お浜は煮え切らぬ事を言い乍ら、臆病な狐のように、振り返り振り返り帰って行きます。

「畜生ッ、何んて嫌な奴だろう」

およつは縁側から引込みました。

が、その時丁度、格子を開けて、何時になく、ノソリと入って来た、大蘇芳年の蒼い顔と、眼を外しようもなく、ハタと逢ってしまったのです。

「あッ」

恐ろしい予感が、水のようにおよつの背筋を走りました。

血に狂う美女

「およつ、居たか」
洞ろな声、眼はギラギラと瀬戸物のように光ります。
「お前さん、何んて顔だい、――あの人が若しや？」
およつの言葉は喉の中で消えました。
「田圃で官兵に捕まったよ」
「えッ」
「上野で散々官兵を斬ったことを知って居る者があって、其場でなぶり殺し同様」
「じや、矢張り」
「これを見ろ」
芳年は、ポンと画稿を投げました。
手に取って見る迄もありません。およつの膝の前でパッと開いたのは、矢立の墨一色で描いた、至って粗末な略画乍ら、紛れもない町人姿にして出してやった日下部欽之丞が、多勢の官兵に取巻かれ、乱刃の下に斬りさいなまれている怨の形相です。
「えッ、畜生」

およつは画稿を叩き付けて、いきなり芳年に武者振り付きました。
「あッ、何をするんだ」
「お前と言う男は、何んと言う卑怯者だい。私とあの人の仲を疑って、力ずくで叶わないから芋兵に、訴えて召し捕らせ、こんな虐(むご)たらしい目に逢わせやがったろう」
「俺がそんな事を知るものか、離せ」
「わざわざ陽のあるうちに連れ出したのは、これを絵に描き度いために違いない。三月でも四月でも、一緒に住んだお前の心持が、私に解らないと思うのかッ」
「馬鹿なッ」
「お前は上野で官兵に斬られるところを、あの人に助けられたと言ったろう。一旦かくまった恩人を訴人して、義理も人情もない、それでも江戸っ児(こ)の端くれかい。畜生ッ、意気地なし、そのくせ、いけ図々しく、こんな虐(むご)たらしい絵まで描いて来やがって、ぬけぬけと私に見せるなんて、何んて根性だろう、外道ッ、鬼ッ」
およつは半狂乱でした。揉みも揉んだ姿で、芳年の首へ胸へ、髻(たぶさ)へと武者振り付くのです。
「俺じゃない——誰か訴人をしたに違いないが、この芳年じゃ無い」
「それほど潔白なら、何んだって、こんな無慚絵なんか描いたんだ。人の死ぬのをヌケヌケと見ていて宜いものか悪いものか、思い知らせてやるから、畜生ッ」
小格子で年一杯叩き上げたおよつは、妖艶で取廻しの良い女でしたが、その代り、執拗で病

的で、意地っ張りで気違い染みた女でした。

「待ちなよ、俺だって人の殺されるのが面白いわけじゃないが、今の時世を写すには、こんなものでも描くより外に仕方が無い。天下後世に、俺の芸道を遺すためには、油汗を流し乍ら、歯ぎしりして、無惨絵を描くのだ」

「まァ、何んと言う曲った根性だろう。地獄の鬼だって、そんな虐たらしい事ばかり追い廻しちゃ居まい――それほど芸とやらが大事なら、美事私も成敗しておくれ。お察しの通り欽さんは私の命まで打込んだ深間さ。それがどうしたんだい、畜生。さア、殺しておくれ、立派にやっておくれよ」

半狂乱のおよつは、芳年に身体を摺り寄せて、四方構わずわめき散らすのでした。

「馬鹿ッ、宜い加減にしないか。俺はそんなことで、人を殺す量見などは微塵も無い。気に入らなきゃ出て行くが宜い。どうせお前が勝手に飛込んで来た家じゃないか、死のうと生きようと、お前の好きなように――」

芳年もツイ持て余し気味に、およつの絡み付く身体をおし退けました。

「私一人で死ねと言うんだね、――ようし、あの人を訴人したお前の前で、見事死んで見せよう、驚くな」

いきなり台所へ駆け込んだおよつ、芳年がそれを追う隙もありません。キャッと言う悲鳴、――研ぎすました出刃庖丁で、我とわが喉も胸も、顔までも掻き切って、満身鮮血を浴びたま

ま、よろぼいよろぼい這い出して来たのです。

「あッ、何んと言うことをするんだ」

「さァ、この、私の顔をよく見ておくれ。この顔を、この姿を、――お前の筆で描けるものなら描いておくれ」

宙に泳ぐ手、銀杏返しの根はガックリ抜けて、血潮の網目を引いた拳に、黒髪がバラリと絡みます。

女の顔は、美しいだけに凄まじいものでした。引釣る眉、ギラギラと死の苦痛を映す瞳、血みどろの頬も唇も痙攣して、綺麗な歯並が、締木にかけたようにギリギリと鳴ります。

「この顔を見て、お前が夜寝られるか寝られないか、――よく見ておくれ。欽さんを訴人した上に、この私まで、――手に掛けなくても、なぶり殺しにしたお前だ――」

「待て、言うことがある。何も彼も間違いだらけだ、――あれ、あれを聴け」

芳年は血に狂う手負いのおよつを辛くも抱き止めて、二軒長屋の隣家――お浜の家のたたずまいを指します。

生垣一つを隔てて、明けっ放した庭先の夕陽に、何も彼も手に取るよう。この時お浜の家には、隊長に従って官兵が七八人、ドカドカと入って来たのでした。

描き出す怨女の悪相

「日下部欽之丞を訴人した、浜というのは其方か。女乍ら、賊軍の大物を討たせた手柄は抜群だ。追って褒美の御沙汰はある筈だが、取あえずお上のお言葉だけを伝えて置く」

そう言う官兵の隊長の声が、近所合壁へも聞えよがしに、凛々と響き渡るのです。

「――――」

それを聴いたおよつ、芳年の腕の中に、必死の眼を見開きました。

「聴いたか、およつ、――あれで、何も彼も解ったろう。改めて言うまでもないが、――俺は唯(ただ)の絵描きだ。世の態(さま)、人の姿は描くが、訴人や企らみをする柄ではない、――俺の言葉も耳に掛けず、お前は飛んだ早まったことをしてくれたじゃないか」

「――――」

「どうせ勤めをしたお前だ。馴染も深間もあったところで、俺はそんな事でヤキモキするものか」

静かに説く芳年、隣の庭からは官兵が引揚げて、お浜のいそいそとした姿が、それを送って出た様子まで手に取るよう。

「お前さん」

「解ったか、およつ」

「堪忍しておくれ、私は――」

今死ぬおよつの眼には、初めて油のような涙が沁み出しました。
「解ったらそれでよい。傷は浅い。静かに手当をするが宜い」
「いえ、私は助からない。助かり度くもない、――お前さんに済まないけれど、私は、私は欽さんの後が追って行き度い」
およつは声もなく、芳年の膝の上に、身を顫わせて泣くのです。
「それも解っている、どうせこの俺とは浅い縁だ」
「堪忍して」
「可哀想に、――お前という女は」
「お前さん、――たった一つの願い、聴いてください」
「何んだ」
「お前さんは此間から、殺しも斬合いも梟し首も描いたが、女の、怨女の末期は手本が無いと言って居なすった」
「――――」
「幸い、この私の浅ましい姿、――息のあるうちに、描いて下さい、――せめてもの恩報じ」
芳年の膝を降りたおよつは、最後の力を絞り出すように、柱に縋ったまま、フラフラと立ち上るのでした。
「それはいけない、――お前の顔に怨は消えた。死ぬ苦しみはあっても、怨女の悪相は無くな

ってしまった」

まこと、法悦に似たものが、血みどろなおよつの顔を、仏作ってさえ見せているのです。

が、形勢は一瞬にして変りました。

此時、隣の物音に気の付いたお浜が、官兵を送り出した序に、庭の木戸を押し開けて、ヒョイと入って来たのです。

「あッ」

目の前に展開した、血みどろの光景に、お浜は逃げることも忘れて釘付けになりました。

「畜生ッ、お前が訴人したんだね、――この怨み、覚えてお出で」

お浜の顔を見ると、忽ちおよつに蘇生える怨み、柱に絡んだ身体が醜く歪むと、眼も、口も、一瞬蒼白い焔を潜ったように、深怨無残の悪相が、メラメラと燃え上るのでした。

「助け――てエ」

あまりの事に、お浜は狭い庭の上に這いました。眼は縁の柱に伸上る手負に吸い付けられて、娘の身体はあまりの恐怖に蟲ほども動きません。

「口惜しいッ」

キリキリと鳴るおよつの歯、風の無いのに、サッとなびく黒髪、柱に絡んだ手が緩むと、手負の身体が、ゾロゾロと崩折れて、庭のお浜を覗き加減に、ワナワナと双手を差伸べます。

最早、背に迫る死の手、お浜をつれて、八寒地獄の底までも行く積りでしょう。

芳年は思わず画帳を取上げました。死の一瞬手前の、怨女の悪相が、名筆に従って、サラサラと描き上げられて行くのです。そのかみ、猛火の中のわが娘を見たという、仏画師良秀のように、――人の世の掟を超えた、芸道三昧の恍惚境にひたり切って、――浮世絵師芳年の顔は、名ある高僧のように澄み切ったのでした。

大蘇芳年の傑作「英名二十八人衆句」は斯うして出来上りました。徳川末期の江戸を彩った、血みどろの世界が、「団七九郎兵衛」になり「稲田新助」になり、「直助権兵衛」になり、そして怨を含んで殺されて行く「笠森お仙」の美女殺戮の図となったのです。

芳年の無慚絵が持った境地、その生々しいリアリズムは、明治画壇に大きなスタートを与えました。それが水野年方となり、落合芳幾となり、輝方、英朋、年恒、年英となり、そして巨匠鏑木清方となったことは言う迄もありません。

青空文庫情報

底本：「野村胡堂伝奇幻想小説集成」作品社
　2009（平成21）年6月30日第1刷発行
底本の親本：「芳年写生帖」春陽堂
　1939（昭和14）年
初出：「オール読物」
　1938（昭和13）年3月
※底本は、物を数える際や地名などに用いる「ケ」（区点番号5-86）を、大振りにつくっています。
※「さア」と「さァ」、「まア」と「まァ」の混在は、底本通りです。
入力：門田裕志
校正：阿部哲也
2015年8月13日作成
青空文庫作成ファイル：
このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（http://www.aozora.gr.jp/）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

芳年写生帖

野村胡堂

2026年10月1日　第二版

奥　付

発行　　青空文庫

URL　　http://www.aozora.gr.jp/
E-Mail　　info@aozora.gr.jp

作成　　青空ヘルパー　　赤鬼@BFSU
URL　　https://aohelp.club/
BiliBili　　https://space.bilibili.com/10060483

Special Thanks
　青空文庫　威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー http://aohelp.club/
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
http://tokimi.sylphid.jp/